※「藤原定家の私家集書写活動―和泉式部の筆跡を中心に―」

岸本　理恵

〈要旨〉

藤原定家が書写に関わった私家集には、本文は側近に書写させて定家が校訂や勘物などを加えたものが多く、定家監督書写本と呼ばれる。和泉式部集のうち定家との関わりが確認できるものは、和泉式部正集上巻・正集下巻・続集の三種で、残された筆跡を定家監督書写本と比較すると、それぞれに同筆資料を確認することができる。これらの筆跡に加え他の側近の筆跡も

分類し、定家監督書写本の側近の筆跡を十一に分け、定家との分担状況や定家の関わり方を確認した。

この上で和泉式部集の状況を定家監督書写本全体に照らして見ると、既に知られている資料から新たな情報を得ることができる。例えば、正集上巻の筆跡は、定家の勘物を持つ多武峰少将物語と同筆であることを新たに確認したが、正集下巻の筆跡は最も多くの同筆資料が現存する有力な人物であったと知ることができる。筆跡の分類により明らかになったように、恵慶集や大斎院前御集は上下巻を異なる側近が書写していることから、和泉式部正集についても上下巻が異なる側近の筆跡であることは不自然ではない。すると、信頼性が疑われてきた極札は、上下巻で異なる筆跡であったことを伝えているものと理解することができるほか、完本は現存しない和泉式部集の宝永七年当時の状況を伝える有効な情報ということになる。

個別の私家集を定家監督書写本という枠組みの中に置き、他の集に見られる特徴を応用すれば、既に公開されている集からでも新たな情報を読み取ることができることを明らかにした。